

第
2
章

7. 13 新潟豪雨災害



7・13新潟豪雨災害の各支部会員の被害状況

◎三条支部会員の被害状況

事務所と自宅が浸水した会員	12名
事務所のみが浸水した会員	3名
自宅のみが浸水した会員	4名
計	18名

(うち床上浸水1m以上の会員17名)

◎長岡支部会員の被害状況

事務所と自宅が浸水した会員	2名
---------------	----

回顧録

平成16年度三条税務署長 平林 悟

平成16年7月13日、夜来よりの豪雨で三条税務署管内では、五十嵐川と刈谷田川の2河川の堤防が決壊、管内の三条市、見附市、中之島町（現長岡市）の3市町が甚大な被害を受けました。税務署庁舎正門前の路上では水深が2mにも達しました。

12日月曜日、定期異動の発令も無事終了。

13日朝、激しい雨の中、長岡の宿舎を定刻に出発したものの新潟行きの在来線は不通、新幹線で燕三条駅へ、バケツをひっくり返したような激しい雨の中駅前から迎えのワゴン車で、濁水を掻き分けながら普段の倍ほどの時間をかけてようやく署へ到着。

激しい雨が続けている。徐々にではあるが路上の水嵩は増し、車の運行も難渋。

13時30分、署の敷地まで水が浸入し始めたため、職員へ退庁指示。保安要員と事務引継ぎで出勤した16名が留まることに。

14時13分、庁舎入口で傘を差し、長靴姿で記念撮影（その後の災害の事など露知らず）。

道路の水深は30cm程度できれいな水で路面の白線も透けて見えている。

署長室に戻り2・3分後、撮影現場を見ると、三条駅方面から濁流がまるで生き物のように、まさに襲ってきた。辺りは一気に茶色に変貌。瞬く間に署の周囲を覆いつくし始めた。

15分後には庁舎外にある変電設備に浸水のため停電。厚い雲と激しい雨のため、この時間にして事務室内は、薄暗い。

14時50分には1階玄関の隙間から濁流の浸入が始まる。道路からは1mほども高い事務室内へ、食堂、書庫すべてが侵水。

濁流が押し寄せて1時間、玄関の2つの自動ドアが濁流の浸入を一時ではあるが、遅らせて、事務室内は外より30cmほど水嵩は低く抑えられている。庁舎敷地内の車はドアミラーまで水没

し、事務室内では床上30cmまでに。

床上浸水が始まってから3時間、皆パンツ1枚で下半身を濁流にさらし、個人課税用と法人課税用のそれぞれの簿書庫から書棚の2・3段以下の簿書、事務室内のパソコンと個人所有の鞆などを16名の手渡しにより2階面接室に退避。真っ暗な書庫の中は1個の懐中電灯の光だけが頼り、事務室内も薄暗い。そんな中、署北側の駐車場に胸まで濁流に浸かっている老夫婦を発見。早く家に戻れというも、身動きが取れない様子。掃除機のコードを命綱にし、2名の職員で救助。2階事務室へ案内、老夫婦に安堵の様子が戻る。

17時、事務室内の水位は既に70cm。1階事務室での退避作業を断念、残った簿書やパソコンは放置、署駐車場で1番高い玄関前に移動した職員の車も屋根を残して水没。署の掲示板も上部が30cm程度を残すのみ。水嵩は依然として増え続けている。

一面茶色の泥水、油が浮き、木材・ゴミ袋・タイヤ・ポリバケツ等ありとあらゆるものが流れてくる。辺りはすべて停電、灯りは皆無。三条高校も1階は水没、取り残された生徒が2階3階の窓から外の様子を伺っている。近隣住民も皆、2階に避難している。

19時、救助ボートが動き始める。静寂の中、突然クラクションが鳴る、2台3台と断末魔の悲鳴か。

局長からの激励の電話。22時、局との連絡も終了。署が避難場所との報道に安否確認の電話が数十本。外部の情報はくたびれたラジオのみ、懐中電灯ひとつ。

徐々にではあるが水が引いていく。長かった今日一日、不思議と不安感はなかった。

7月14日、皆、早起き、4時半、水深150cm。救助隊員より、ビスケット・水等の救援物資をいただく。

5時20分、救助ヘリが署の頭上を数機旋回。

署内の状況、個人課税の書庫内は、6段の書架の4段まで水没、下2段までは退避、汚水を吸ったバインダーはパンパン。法人課税書庫内は、5段の書架の3段目1/3まで、下1段のみ退避、積み上げていた用紙類は崩れ落ち、足の踏み場もない。事務室、机・OA機器・キャビネットには茶色の泥が付着、フローアもヘドロで覆われている。

午前中には、事務室内に水はなくなり、玄関ロビーの清掃も。

午後になり、ゴミ袋に背広、靴など入れ、長靴、下着姿で順次、署を脱出、正門側道路はまだ水深1m。

16時、まさに「難民」。五十嵐川の新大橋から、嵐北地区へ入ると道路が乾いている。

7月15日以降、猛暑と悪臭の中、庁舎内外の汚泥の除去と消毒、そして多くの水没した簿書の乾燥には炎天下、2ヶ月もの長期間に渡り職員が汗を流した。この間、仮庁舎での事務、長岡署でのKSK事務が続けられた。

9月21日の庁舎の開庁。局署の職員からの支援も大きなものがあったが、三条署の全職員が復旧という、同一の目的を持ち作業を続けた、このことがチーム三条として、強い一体感を持つこととなったのも確かであった。

また、この期間、多くのボランティアの方の姿を目の当たりにして、力強く感じた。

10月23日には中越地震と、大きな災害が2つ重なった年になりました。

被災された方の多さから、国税局へ被害額算定の簡易計算方式の採用を働きかけました。

年が明け、確定申告に向けて。まず、雑損控除の説明会を、源泉徴収票が発行されたであろう1月24日から28日までの5日間、午前9時30分から、午後1時30分から、そして午後6時からの3回行いました、説明会の終了時に大きな拍手をいただき、報われた思いがしました。リサーチ・コアへの相談会場の変更や雑損控除などの広報を実施して、確定申告期を迎えました。

平成17年3月15日水曜日、福島・新潟集中豪雨、中越地震に係る一連の作業や事務のひとつの区切りがつかしました。申告件数で前年比6千件の増加、面接件数は7,500件で47%の増加となりましたが、職員の努力はもとより、税理士会からは大変なご協力をいただき、円滑な相談・処理ができました。

災害のないことを祈りながら、「元気だしていこー！新潟」。

水害発生当時を顧みて

平成16年度三条支部長 関根 朝秋

100年に一度の豪雨のなかで

平成16年7月13日は朝から梅雨末期の激しい雨が降り続き、道路の低い所では雨水が溢れて通行不能になっていました。午前11時ころ職員から大崎地区の堤防が決壊しそうだとの情報をもらい、すぐ岩本会員に電話をして被害の有無を確認しました。又、この日は加茂市内の中学校で租税教室が開催され、岩本事務所内の落合会員が講師を勤めることになっていましたので、その状況も確認したところ、既に加茂市内の中学校に向かったとの連絡をもらいました。

伝わってこない情報

午後になっても雨は降りやまず、3時頃に外に出て様子を見ましたが少し雨水が道路に溢れ出ている程度でしたが、すぐに泥水に変わってきて水量も増加してきました。そこへ関根龍一会員ご夫婦が車で通られ、曲渕の堤防が決壊し水が押し寄せて来て自宅や事務所が危ないのでこれから近くの中学校へ避難するところだと聞かされました。関根龍一会員の車が通過してからすぐに泥水が波のように押し寄せて来てまたたく間に道路が見えなくなりました。急いで事務所に戻り重要なものを事務所の2階へ上げはじめましたが、泥水の勢いは凄まじくあっと言う間に事務所

の中に浸水し椅子も机も水没して全く見えなくなりました。又、この泥水は流れが速いので建物の中にも体が押し流されそうになり、作業を続けるには危険と思い職員と2階へ避難しました。2階の窓から外を見ると、あたりは一面の泥水で材木やゴミが勢いよく流れていました。事務所の駐車場を見るとほとんどの車は水没して見えなくなり、背高の車だけが屋根の一部を確認することが出来ました。この泥水の中を歩いて自宅に戻ろうとしていた青年が、これ以上外にいるのは危険だと言って私の事務所に避難して来たので話を聞いたら、この付近は道路から1.5m以上の水位がありその泥水がかなりの速さで流れているので外へ出るのは危険だから、しばらくこのまま2階に避難しているのがよいでしょうとの事でした。携帯電話も混雑しているので使用できず家族と連絡できなくて困っていましたが、夜11時を過ぎてからようやく通話できるようになり各人が無事なことを家族に伝えることができました。翌朝には自衛隊や近県各地の消防署員がゴムボートで救出活動を始めましたが病気の人、平屋建ての人などが優先され私が事務所を脱出したのは14日午前10時頃で、自宅に戻りテレビを見て初めて被害状況を知ることができました。

災害時の教訓を生かして

この水害で三条支部は正副支部長が被災してしまい両者とも支部活動がまったく出来ない状況になり、しばらくの間は木原総務部長に支部長代行をお願いする事になりました。三条支部では以前から支部事務局を設置することについて意見交換を進めていたところでしたが、この水害の教訓から支部活動の運営に万全を尽くすためにも、支部事務局を設置する事が必要ですと会員皆様をお願いをして現在の事務局を設置させていただきました。今ではこの事務局が支部活動の要となっていますので事務局を設置して本当によかったなと心から思っています。

全国の会員の皆様に感謝

この水害に際しまして全国各地の会員の皆様から心温まるご支援ご協力を頂戴致しました。水害当時の支部長として三条支部会員を代表して心より厚く御礼申し上げます。被災した会員をはじめ被災地域の復旧作業はまだまだ続いています但元気に頑張っています。

本当にありがとうございました。

びっくり仰天7・13水害

三条支部 石川 勝行

親類の伯母さん伯父さんからは命の恩人と言われました。一方女房からはどうして早く帰って来なかったのですかと今でも追及の的。また、事務所の一階は未だ浸水の跡が。

午後4時半頃 五十嵐川に架かっている新大橋の土手の上。事務所および自宅方面を見るとすべて2メートル弱位の水浸し。道路には何十台の車が水没。先には三条税務署も。周りにはまだ消防隊員4～5名位と近所の住人20人位しかいません。海水浴に使うオールのついたゴムボート1隻。見回したら背広着ているのは自分一人。近所の30歳の建設会社勤務の男「妻と子供がいるから泳いで助けに行く」消防団の隊長「やめろ。」部下に「このボートで行ってみろ。」勇敢にも行きましたが手のオールでは流され危険で結局戻って来ました。普段は車が通る道路が凄い水の流れ。隊長・無線電話で「エンジン付のボート至急用意して。」「何、2隻しかない。」「ここの辺りには老人子供がたくさんいるらしい。どうしても1隻は必要。至急持って来てくれ。」周りの住人からは祈るような声。「急いで。」この隊長に何人が命を救われたのでしょうか。30分ほどで1隻のボートが到着。平屋の年配の人がいる家から救助ということになりました。最初は近所の老婆と娘さんの2人。2番目が私の両親と妻。玄関が開かず天窓から救助されました。3番目が伯父さんと伯母さんでした。伯母さんは寝たきりで、2階には上がれませんと隊長に説明し、優先的に救助してもらいました。案の定、全身水に浸かっていた為、体温計の測定温度に達しない低温になっており、救助後すぐ救急車で病院に行き命が助かりました。ちょっと先の三条税務署の近くで一人暮らしのおばあさんが2階に上がれず亡くなりました。

先程の建設会社勤務の家族は、2階にいるはず。何千人も同様の人がいるから若い人はまず後回しということになり、しぶしぶどこかに行ってしまいました。翌朝10時頃、胸まで浸かりながら、家族の所へ行くのが見えました。女房には土手の上だから救助を頼めたと説明しても、革靴・背広姿では説得に欠けていたかもしれません。

暗くなり、自分の寝るところがない。ホテル等に電話したがすべて満員。ようやく市外でツイン1室取れました。

実は、当日午前9時半頃、五十嵐川の護岸を通して新潟市の仲間のところに経理の打合会に行っていました。水の流れが速い位で路肩にも達してなく、まさか洪水とは想像もつきませんでした。

たまたま当日朝、事務所の職員の一人が子供が熱を出し事務所を休みました。丁度、五十嵐川決壊現場の近くの高台に自宅があり、「堤防が切れたよ。2時間後位にそちらに水が行く。」との緊急連絡。事務所の勤務職員が早上がりさせて下さい、と新潟にいる私の元に連絡。「まさか。しかし、戸締りして帰ってよいとの許可。」結果として、職員の車はすべて無事。一方、事務所の車、1階にあった書類及び機器備品は全滅。すべて水没。何も残りませんでした。

午後6時頃になるとTVニュースのキャスターが詰めかけて来ました。当然私にもインタビュー。「ご家族は大丈夫ですか。」とか。「インタビューは放映してもよろしいですか。」私は背広を着ていたの、放映しないでと言いました。ところが後日東京にいる友人や子供からTV出ているのをみたと連絡がありました。びっくりしました。

1か月のホテル住まい。出費がかさみましたが健康に代えられません。顧客も表面的には理解

しても、仕事への要求は当然してきました。あまりにも仕事を優先したため女房からは今も…。

8月13日に仮設住宅に入居。嬉しかった。ホテルは掃除の他人が毎日入ってきます。従って、仕事の道具は置いていけない不便がありました。毎朝のバイキングも辛かった。

事務所の建物の新建材は水を吸いました。翌年の春に一階の壁に緑色のカビ。建築会社に依頼し修理を頼んで壁の一部を開けたら、どどっと水の落下。

書類は泥水を吸うと①膨張し本棚から取り出せなくなります。②書類は糊づけされたようになります。③筆記用具によっては文字が滲んで読めません。④不衛生で気持ち悪く見るのもいやでとても素手で触れません。⑤表面もカビで菌糸が飛んで来るかと思い、中を開けられません。⑥写真はすべて剥がれます。

個人的にも物凄いダメージを受けました。もう二度とは受けたくないと。ヨーロッパの言い伝えに「卵は一つの皿に盛るな。」があるそうです。

会計事務所にとって、情報データは宝です。命です。会計上の情報は現在ほとんどコンピューター化していると思われます。是非データのバックアップは、して下さい。重要書類はスキャナーで電子化も必要です。また、金庫は一般的に防水ではありません。過信しないで下さい。この世に絶対的安心はあり得ません。

また、生活の糧が得られるかがポイントです。事業保険は損金になるわけで付保しておくことが重要であります。

私の場合、事務所の2階をメインにしていた為、救われました。また、当日、車1台と背広が残ったため、翌日からの仕事も出来ました。車があったおかげで市外から通うことができました。車のトランクは動く家庭用・事務所用倉庫に変わりました。

事務所職員で被災しなかった3名の献身的な復旧作業で事務所は生き延びられました。本人たちは被害実損がなかったことも幸いと思います。

一部の顧客を除いて、やはり他人事との、感じでした。民間営利企業からしては当然かと思います。欲を言えば、こういう時こそもっと官庁等には救援とか期限の延長等の対応を十分にして欲しいと、当事者になって良くわかりました。

ある三条税務署の署員は、当日帰れず2階で泊まり、翌日下半身びしょびしょになり五十嵐川の反対に行った時の周りの冷たい視線には驚いたと言っていました。同じ三条市内なのに。当然かもしれませんが、当事者以外、まったく、他人事のようでありました。

最近、事務所の新人職員に、「1階でここまで水が浸水して来たよ。」と示すと、「びっくり仰天」「信じられない。」との言葉。

びっくり仰天では、後の祭り。普段からのバックアップ等の対策・準備を怠らずにが、被災経験者の格言となりました。

7・13水害

三条支部 勝見 悦行

この日は、生涯忘れることのできない日になりました。

いつもと変わらない朝を迎え忙しくしていると、事務所の職員より電話があり家に水があがったと言う連絡だった。夜中にそんなに降っていたとは思わなかったが、家の前の新通川の水位もかなり上がっていた。

事務所の前の通路は冠水しており、駐車場にも水が溢れてきていた。出社できた職員と午前中、仕事をしていたが雨は降り止まず道路の水も徐々に増えて行くのがわかったので心配になり、お昼すぎに五十嵐川を見に行ったところ新大橋すれすれまで川の濁流が迫っており今すぐにも堤防を越えそうな勢いであった。

事務所に帰ろうとしたが、三条税務署前の道路はすでに冠水しており車が動ける状態でなかった。冠水の少ない脇道を走りながらようやく事務所に辿り着くことが出来た。

帰る途中車が動かなくなった時、地元の住民の方から冠水の少ない道を教えて頂いた事が思い出される。

事務所に帰ったところ、職員の何人かは家に水がきているとのことで早退していた。このままでは残った職員も、もう帰ることが出来なくなると思い書類などを机の上に上げて帰ることにした。

家では、上の子は保育園より自宅待機と連絡が入り、その後休園との知らせとなった。お昼近く新通川が見る見る水位が上がり、あっという間に家に浸水してきた。あわてて1階の物を上げられるだけ2階に上げ家族で2階に避難した。すぐに電気が断たれた。外部との連絡手段は何もない。

暗闇の中どんどん水が増えていく。ヘリコプター、救急車、パトカー、サイレンの音が一晩中鳴りひびいていた。何よりも救いだったのは、家族が全員一緒にいられたことだった。

次の日、少しは水嵩が減っていたがとても外へは出れない。私の家には小さな子が2人いる。すぐ近所でヘリコプターで助けだされている人がいる。子供達だけでも助けてほしいと願い救助を求めると、他のヘリコプターより救助隊の人がおりてボートで家の横を通った。乗れるのは子供達と大人が1人だけと言われ母親と一緒に乗ることになった。避難場所に行く途中、沢山のの人に声をかけられ、みんな助けを求めている。しかし、それらの人が一緒に助けだされることはなかった。なぜなら病気の人や幼児、一人住らしの老人が優先だったからである。避難場所である一之木戸小学校でも多くの人がいた。お昼に弁当とペットボトルの水が1人に1本配られ、次の食べ物はいつくるかわからないからと言って手渡された。その後、妻と子供達は祖母の家に避難することができた。三条市とは隣の市なのにこちらは別世界のような。

い。しばらくはお互いに連絡もとれず、親子で離れ離れの生活が続いた。その後やっと一緒に暮らせるようになった時の子供達の笑顔は忘れることが出来ない。

自宅も被災したので事務所に入ることが出来たのは数日後であった。

事務所は高台にあり、せいぜい床上程度と思っていたが机の上まで水がきており書類、書籍等は全部水没し、コンピューターなどの事務用機器も全て濁流の中に沈んでしまった。

被災しなかった数名の職員、業者の方々の御協力で何とか復興することが出来ました。

多くの皆様より、温かいお言葉、お手伝い、お見舞いを賜りましたことを心より御礼申し上げます。

多くの物を水とともに失いましたが、この水害を通して体験したこと、感じたことは、計りしれません。未熟者ですが、このたび知らされた人の道を心に刻み、この御恩に如何に報いるかを一生涯かけて考えてまいりたいと思います。